哲學研究　第十六號

ニイツエの學制論

小西重直

一

ニイツエは千八百六十九年其二十四歳の時に瑞西のバーゼル大學に招聘せられ、翌年の普佛戰爭には傷病兵の看護の爲めに盡力したが、病兵の病毒が自分に傳染した爲めに、最早軍役の勤務に堪へなくなつて再びバーゼル大學に戻つて來た。爾來健康が殊に勝れない樣になるのであるが、其二十七歳の時卽ち千八百七十二年に學制改革の根本精神に就て講義をなして居るのである。此講義は同年一月の中旬より三月の下旬に亘り「吾人の學校の將來に就て」といふ題目の下に前後五回になされたものである。手許には不幸にして獨逸文の原書がなく不得已ケネデーの英譯に基き論述しやうと思ふのであるが、同氏は譯書中の註に於てニイツエは其後尙六回及七回と二回分の講義の追加を試みんと企て其目次は遺著の中に表れ居るも左程

重要のものとは思はぬと斷つて居るが原書が手許にないので夫れに就て余の考を述ぶることの出來ないのを遺憾とするのである、余は先づ此五回の講義に於ける重要の點を叙述し、次に夫れに對して卑見の一端を述べて見やうと思ふのである。

二

講義の體裁は科學的組織のものではなく假作的對話的のものとなつて居る。ニイッエがボン大學に學生として學んで居る時代に、學生中氣分の合つた少數の有志者と御互の獨創力を錬る目的で一種の會を組織し一ヶ月に一度位、詩や、論文や、建築圖案や、音樂の曲などを會員が持ち寄つて互に語り合ひ、又時にはライン河畔の深き靜かなる森の中などにて默想に耽るなどの規約を結んだのであつた。時は夏の終の頃、ニイッエは此會員の一人と森林の生活を味はん爲め、何時も來慣れし森の中へ入つて行つた。彼等は兼ねてピストルの射擊を好み森の中に適當の射擊場を見出して居つた。ニイッエは一發を試みた、小丸の聲は森の靜寂を破つて遠く高く響き渡つた。彼は續いて第二の丸を發せんとする殺那、彼の後に一人の老人が現はれて彼の腕をしつかと攫んだ、友人はまた一人の若者の爲めに不意に其發砲を中止さ

せられてしまつた。蓋し此老人と若者とはニイッエ達はピストルを以て森の中で決鬪をなして居るものと誤解して彼等を制しやうとしたのであるが、ニイッエ達は其誤解の爲めに自分共の樂を妨害されたので是に兩者の間に一場の口論が戰はされたのである。互に議論をなして居る間にニイッエ達は此老人は世を遠かり居る所の大哲學者であつて其學僕らしきものと共に此靜かな森に來り誰れかを待ち合はして居るのであるといふことを知つた。然して此老哲學者の物語る言葉が自然々々にニイッエ達若き學生の注意と尊敬とを喚び起し遂に此森の中に於て眞夜中に至るまで教育問題に就て互に對話を試むることになるのであつて吾人は此假作的對話の中にニイッエの教育觀の根本が說かれて居るのを見出すのである。

三

ニイッエの學制論の根本思想は機械的の國家人を作るのではなく創造的の文化人を作らんとするのである。現在生活のパンに生きんとするものよりも文化的理想的生活に入らんとする者を作らんとするのである。固より多數の人間は直接に國家に役立つ樣な、又國家に依屬する樣な、或は現在的パンの生活をなし得る樣な教

育を受くる必要もあらんが機械的盲目的であつて理想や創意性のないものは卑むべきである。殊に少數の大響導者大天才を教育し得ないことが現在の教育制度の大なる缺陷である。文化其ものに向つて突進的に修養を積む所の强者の教育が學制改革の根本思想たるべきことを高調する所に彼の教育論の特色が發揮されて居る。次に其所論の大要を述べて見やうと思ふのである。

吾々は現代の教育に於て二の主なる傾向のあることを見出すのである。其一は出來る丈教育を擴張普及せしめんとすることである。もう一つの傾向は教育を偏狹にし此を軟弱にすることである。前者は出來る丈多數の人間に教育を擴むるものであつて、後者は國家に機械的に役立たしめんとする樣な生活の爲めに、教育上の最も高尚な最も崇高な要求を棄てしむるのである。而して此教育の擴張普及の聲は近代の國民經濟の獨斷說を奉するものゝ間に主張せらるゝのであつて、出來る丈多くの知識と教育を多數のものに與ふる所に、出來る丈多くの需用と供給がある所に最大の幸福があるといふ信條を有して居るのである。斯かる場合に於ては教育の目的は實利主義である、黃白的實利主義である。多數の通貨的人間(current men)を養成するのである、各人の自然性の許す範圍に於て彼等を通貨的ならしめ、其收得せ

る知能によりて出來る丈大なる幸福、出來る丈多くの金錢上の利益を得せしめんとするのである。急速的に此種の人間を多數に養成することが彼等の義務と感ずる所のものであるのである。而して又此經濟上の方面のみではなく宗教上の壓迫より起り易き不幸を避けん爲めにも教育の擴張普及の必要が認められ、國家の自衛自存の爲めにも其必要なることが主張されて居るのである。

第二の傾向としては教育を偏狹にし軟弱にするの弊風であるが此偏狹の現象は專門學者の研究法に於て見出すことが出來る。近代の學者は何等かの研究上の成績を得んとせば或る一學科一問題に關し特殊の研究を積むの必要を感して居る。此學科此問題のみに就ては彼等は一般の群衆に比して優勝の地位を占むるものであるけれども其他の事項殊に人生に於ける最も重要なる事項に關しては一般の群衆と毫も異る所がないのである。此意味に於て學問上の專門家といふものは恰かも工場に於て巧に機械や器具を取扱ふ所の職工の樣なものである。近代の獨逸學者の如きは多くは此類の甚だ狹き局部特殊の專門家である。斯くして彼等は眞の文化より遠かるのであるが而かも狹小の特殊問題の研究に忠實なるものとして却て賞讃され敬重されて居るのである。而して教育を多數のものに普及するの結果

は所謂弱者の教育となつて强者の教育とはならない。軟教育に陷りて單に機械的依賴的な國僕を作るのみであつて社會の嚮導者となる樣な少數の優者强者に硬教育を施す餘地を無にするのである。吾々は此等の傾向に反對し教育の擴張普及に對しては其制限と統合の必要を叫び、教育の偏狹軟弱の傾向に對しては其硬化と獨立とを高調せねばならないのである。

人は生存競爭の爲めにも學問せねばなるまいが然し此目的の爲めに學問するのは眞の文化的修養ではない。眞の文化は日常の生活の必要や要求や生存の競爭などを超越する境地より初まるのである。人によりては其生存の競爭を目的とする卑しき自我の欲望がストック的に甚だ寡い人もある。然し他方には此欲望甚だ盛にして彼等の所謂新生活實現の手段として富や、力や、才智や、沈毅の態度や、能辯や、外見名聲などに對して貪慾飽くことを知らざる人も居るのである。然し此種の人は縱令其所謂新生活に於ても永久の生活を望み居るとしても夫れは結局一幻影たるに過ぎぬのである。彼等は不斷に卑しき欲望を追求する所の人格より自由になることが出來ない。自己の執着的の我の妨なしに默想玩賞し得べき理想の光明體と漸次に遠かり、眞の文化の高尙なる生活より追放さるゝのである。何んとなれば眞の

文化的生活は卑しき物質を追求する人間に接して汚るゝことを嘲るからである。パンを得る目的の爲めの修練は眞の文化的生活への修練ではない、夫れは唯生存競爭に於ける行動に對する戒律の集合に過ぎぬのである。

昔の希臘の國家は其國民に對しては監視者といふよりは寧ろ力强き友達であつた。其燦爛たる文化の發達は國家の保護に依ることが少くはない、國民も國家の恩誼に感謝し國家の爲めに戰つたのである。本來眞の獨逸の精神の表現ともいふべき宗教改革や、大音樂や大哲學などに於ては文化の發達文化的生活の眞髓が表はれて居るであらうと思ふのであるが、今日の國家の經營する教育に於ては此精神が缺乏して居るのである。隨つて國民は物質慾の奴隷となり眞の文化的生活より益遠からんとして居る。彼等は眞の獨逸精神を嫌惡し、文化的生活は强者的性質であることを恐れ、眞の偉人天才を追放し、少數の大指導者よりの嚴格なる訓練より逃れ隱れんと企てゝ居る。放肆なる軟教育を受けて國家の爲めに淺薄な外面的な服役をなし永久的な內面的な服役を忘れて居るのである。而して斯かる意味に於ける教育の普及は無用過剩の學校と教師とを要するに至つたものであらうと思ふ。今の人文中學の如きは單なる意味の學問の場所であつて眞の文化的生活の準備として

の學問の場所ではない。肥滿病的文化の場所にあらずんば外面壯麗なる蠻魂の住家に過ぎないのである。軟敎育普及の結果として過剩に僱入れられたる敎師は全く其物質生活の爲めに働くものであつて文化的生活に要する性格を缺て居るのである。斯くして國家は文化的國家を作らんとして却て非文化的國家を作つたのであつてプロイセンの如きは其最も甚しきものである。殊に國家は其中學校に對して徵兵上の特典を與へ、大小官吏の登用、大學入學の特權を認むる所より中學は青年に取りて世間的名譽の標的となり之れによりて國家の與へたる特種の利益を得んとするに至る。要するに國家は青年をして敎育の國家的普及の炬火を手にして國家の前に表はれ來らんことを要求し、青年は其炬火の光によりて其最高の標的として其敎育熱望の報酬として國家を認識するに至る樣な功利的要求を促がすものといはねばならぬのである。

敎育の方法に就て見ても今の人文中學などのやり方が間違つて居る。例へば樹木や、岩石や、風や、草花や、蝶々や、青々とした牧場や、山の傾斜などは皆夫々の言語に於て青年に物語るのであつて青年は此等の自然物の色々の姿の中に自己自身を認識すべきである、此等の中に自然界の萬象の形而上的統一を無意識的に感知すべきで

ある、自然界の永遠恒久の有樣其必然の活動、自然物に對する默思等は軈がて青年の心を安靜になすべきである。然るに今の敎育方法は自然と青年との接觸融合を妨げ徒らに自然を征服する方面のみに力を注て居る。此目的の下に敎授されたる動植物や生理地質無機化學などの知識は青年の形而上的思想を破壞し、青年の自然性的見地を打破し、其代りに敏捷怜悧なる計算を敎ふることになつて居るのである。之れ明かに文化的生活、文化的國家の國民としての生活に對する敎育法ではなくして全く目前の生存競爭に對する淺薄なる敎育法である。人文中學にては生徒が卒業後大學に入り大學の學生としての自由なる生活に對し十分なる自治力獨立力を養ふと稱せられて居るけれども事實は決して斯の如くになつて居らぬのである。而かも大學其ものゝ敎育を見ても學生と大學との關係は唯だ聽覺によりてのみ結合されて居るのである。敎授は單に講義し學生は單に此を聽くのみである。本來學生の自由な獨立の生活といふものは學生自身が自ら語り、自ら視、單獨孤立でなしに仲間の一人である場合に實現さるゝものである。彼等が自分で生活をなす所に實現さるゝものではあるまいか。固より大學には大學自由なるものがあつて學生は何を聽くべきかを自ら選び、講義を其儘信ずることも强へられない、敎授も亦自ら

其好む所のものを講義するのである。斯くて一の口の所有者たる教授と多くの耳の所有者たる學生との關係は內面的には切斷されて各獨立となるのであらう、世の中には妙な自由獨立もあつたものである。而かも此教授と學生との後背には國家なるものが嚴然と控へて居る彼等教授や學生をして國家は此不可思議なる講義と聽講の作用の目的の全部であると考へしめて居る。實に吾々の大學に於て文化的修練といはれて居るのは口より耳への單純なる作用に過ぎぬのである。斯くて大學の自由といふものは眞の哲學、眞の古典、眞の藝術を有して居らぬ所の空虛なものとなつた。十九世紀の初めに起つた學生團の意氣や、ルーター、カント、シラー、ヴェーバー、ケルナーなどの精神なども十分に感得する力もないのであらう。獨逸人に固有なる創造力や知識欲や勤勉犧牲の精神などが大學の空氣の中に見られぬことになりはしないか、蓋し凡ての文化は大學に於て自由として考へらるゝものとは全く異る所の態度に初まるのである。卽ち服從、從屬、訓練などが夫れである。指導者嚮導者は之れに從屬する隨從者を有する如く隨從者はまた嚮導者を得ねばならない。此兩者の間には精神の優劣强弱上の階段があつて而かも兩者相互に先天的に此方向に向つて動いて居るのである。此階段的差別は永久的のものであつて一切の物

は凡て皆此傾向を有し恰かも豫定的の調和とでもいふべきものである。然るに現代の教育は中學に於ても大學に於ても眞の天才、眞の嚮導者を地平線上の低き場所に引き下げんとして居るものであつて文化的生活の實現に逆行して居るといはねばならぬのである。

八

以上はニイッエの教育制度に關する根本思想の大觀である。彼自ら緒言で斷つて居る樣に彼は中學や大學の學制の改革案を作製したのではなく其時代の教育の弊風を擧げ改革の根本思想に就て述べたのみである。而かも科學的組織的に論述したのでないからして往々概念や意義が判然しないものもある。例へば所論の骨子ともいふべき「文化」の意味などは極めて不明瞭である、單に物質的生活に對する精神的生活理想的生活といふ樣な意味で使用されて居る樣に思ふのである。

彼は近代の教育界に於ける弊風として實利主義に基く所の教育の擴張普及を痛罵して居るのであるが若し教育の普及が實利主義の結果であるとするならば彼の所論に共鳴せざるを得ないのであるけれども事實は全體的に此れと一致しては居

らないのである。蓋し希臘時代に於ては教育と實際生活の關係が未だ今日の如く密接ではなくしてアゼンスなどに於ては教育は或意味に於て生活其ものゝ方便ではなく生活の裝飾である樣な傾向があつた。羅馬時代に於ても能辯術の教育などは國民全體の生活問題と密接の關係を有して居つた譯でもないのである。中世紀に入りては宗教界、武士、市民の階級等に於て夫々自分達の生活に必要な教育をなしたのであるが何れの方面に於ても宗教的教育が根柢となるの傾向を有して居つて現在生活の教育に於ても尙且つ理想的生活の調子が明かに表はれて居つた樣である。文藝復興時代に於ては神と遠かり人間夫れ自身に歸り伊太利などに於ては世才のある人物を作るの傾向もあつたが日常の實際生活との關係は今日の如く緊密のものではなかつた、殊に中世の末頃から起つた大學などに於ても大學起源の精神であつた所の學問の爲めの學問の研究といふ態度は依然として存續され、古典學の研究などは近代に至る迄ニィッイの所謂文化生活に緣近き一般陶冶、精神教育と殆んど同一意義の樣にも考へられる程であつたのである。宗教改革に於てルーターが普通教育の普及を叫び大學教育の改善を主張したのも本來は外界の寺院の教權に依賴せずして人間各自內面の本心より宗教的信念を得させやうとする理想的要求

からであつた。佛國革命當時や其前後に於て盛に敎育普及の聲が高くなつたのも國民の自覺に基き政治を改善するの必要を認めたことや、成るべく普く其幸福を同樣にせねばならぬといふ樣な考より出發して居る樣に思はれる。フィヒテが其「獨逸國民に告ぐ」の講演に於て殊に國民敎育の普及、義務敎育の勵行を叫んだのも國民全體をして善の爲めに善を盡す樣な人物となし、國民全體を以て國家を防衞せんとするの考からであつて實利的といふよりは理想的の動機であつた。フンボルトがフィヒテやシュライエルマッヘルやサヴエニーなどの調査委員の意見に基き伯林大學建設案を立てたのも劍に敗れたるプロイセンをして學問の勝利者たらしめんとしたからである。フィヒテの所謂理性五段の發達階段に於ける第三段目の解放時代利己的な未熟の自覺時代が卽フィヒテの言の如くにプロイセンがナポレオンより大打擊を受けた時代に相當するとするならば伯林大學の建設は實にフィヒテの理性發達の第四段目なる學問時代に進む道程の第一歩と見てもよい、人間が眞理の聲に從つて行動する發達期に入つたものと見てもよいのであつて之れも亦一種の理想的要求の表現であると思ふのである。近代に於ては何れの國に於ても其國家及社會が各人の自由の發達の爲めに、國家社會自體の發達の爲めに敎育の擴張普及に努力して居

るのであつて單にパンの生活の爲めに、現在の實利生活の爲めのみではないのである。日本に於ても德川時代の學問奬勵は單に武的統治より文治の狀態に移らしめんとの政策とのみ見ることも出來まい、よし初めは此意味を十分に有して居つたとしても漸次學問によりて人物を高尙にせんとの理想的要求が表はれて來て居ることゝ思はれる。明治に於ても現代に於ても個人や國家社會の永久の發達を標的とし決して現在の實利生活を根底になして居るのではない。ニイッエの所謂文化人、文化國家を作らんとの理想的要求は時代により其程度の差はあるけれども實に長い間人類界に於ける敎育普及の動機であつたのである。然るに其結果は現代の如く敎育を實利生活の方便となすに至つたのは果してニイッエの說くが如く國民經濟上の實利思想や、國家が學校の卒業生に附與する特權などの影響のみであるや否やは疑問である。此等の影響は之を是認するとしても其外に尙生存競爭が激烈となつたことや、生活程度が高くなつたことや、社會自身が確實なる敎育を受けたるものに對して生活に都合よき職務を與ふることなどが直接に如上の傾向を生み出して居るであらうと思ふのである。又單に夫のみではなく人心の一部分には生物的の生存に關する考が潛在して居ると假定しても人間一般の向上心といふものが昔

より今日は比較的均等に發達したといふことも見逃がすことの出來ない事實であらうと思ふ。然し乍ら教育が普及して多數のものが學校に集れば顚才も鈍才も一所になり其結果は教育の程度を低めニイッエの所謂單にパンの生活のみを目的とする樣な軟教育の弊が起つて來るといふ事實も否定することが出來ない。現代に於ては軟教育といふことは單に一概に教師が手を盡し過きて被教育者の自發鍛錬を缺て居るといふ樣な意味は考へられて居るのであるが、吾々は現代學生の趨勢に顧み眞の文化的生活を目的とせずに單に實利のみに走るの教育をも軟教育と稱したいといふ事はニイッエに共鳴する點である。學級編成の問題や、兒童本位、個性尊重の教育主張の如きも一面には此種の理想的要求を滿たし得る樣に研究されねばならぬと思ふ。然し又教育の普及は一面には軟教育に陷るの弊があるにしても他面には普及の結果一般群衆の知識や能力の程度が高くなるのであつて、從つて其多數者の中より非凡のものも現出するのであるから教育普及は非凡者を出すべき堅き地盤であると見ることも出來るのであつて教育普及といふ事は全然軟教育のみを意味するものではない。而して又ニイッエは現代の專門學者の研究が餘りに偏狹なる特殊問題に走るも教育の弊であるとして罵つて居るのは或る意味に於ては

是認さるゝ攻擊であるが然し研究問題は如何に狹きものであつても如何に特殊的のものであつても夫れが人生に意義あるものであるならば、又は夫れが學問上に意義あるものである場合には嚴然として研究の價値を有して居るものと見なければならない。彼の攻擊の目標は餘りに空漠であつて敵を逸するの感がある。

教育を制限して强者の教育を施せとの彼の意見は一面には民衆一般の教育をも許して置き、特に眞の文化生活をなす嚮導者や天才を作る爲めに、高尙なる教育は此を少數者に限りて施すべしとの考と見てよからうと思ふ。今日各國の教育の實際に於ても又理論としても斯くあるべきであると思ふが、問題になるのは何れの程度より如何程迄に此を制限するかである。又單に制限のみを加へても此を保護しなければ十分に研究を遂ぐることは出來ない。今日の急務は制限案よりも保護法の方案である。相當の嚮導者になり得べき素質あるものも生活の困難より其才能を發揮するの修養を積むの餘裕がないものが多いのであつて日本の戰後の教育に於ては斯かる點に大なる力を盡さゞる可らずと信ずるのである。尤も現代に於ては此嚮導者此天才といふものと一般民衆との差はニイッエの考ふる樣に左程大なるものとはなり得まいと思はれる。現代の人は教育普及の結果として其知識能力に

於ては階段的差程よりは寧ろ傾斜的斜面的差程を示して居つて一人の嚮導者に隨從するよりは連帶責任的協同作業的の態度になつて居る。傾斜的斜面的の社會生活を階段的になさんとするのは進歩の潮流と逆行することになる。殊に階段的の差程は永久的豫定的であるといふ樣なニィッエの考方は現代の社會組織の實狀と甚だかけはなれたる立論であると見ねばならない。然し夫れにしても或程度の嚮導者がなければ決定的生活が十分でないのであるから國家社會は其發展の條件として此を養成せねばならない。大天才でなくとも少くも現在のバンの生活、技術其ものゝ生活、機械的生活のみに局限せらるゝ樣な人物でなしに理想的要求を有して居り理想より新技術を生み出す樣な精神的な創意的な人物を養成すべきことは凡ての敎育機關を通して必要なことに相違ない。此點に於て理想的文化生活と實利的の現在生活とは互に握手することが可能なのであつてニィッエも眞の天才と眞の實際人とは同一人に於て矛盾せずに共存するといふて居るのである。要するに敎育の普及といふことゝ强者の現出、嚮導者の現出といふものはニィッエが考ふる樣に相反するものでなく兩者は互に兩立し得べきもので現代の敎育問題の重要問題として其兩立の方法が研究されつあるのである。

更らに又ニイッエの所謂文化人の教育と獨逸の國家との關係を見るに、一言にて言はゞ國家の教育政策は現在のパンに生きる機械的の人物、流通貨幣的の人物を作るものであると痛罵して居るけれども獨逸國を咀詛して居るのではない。彼はバーゼル大學に招聘せらるゝ前々年卽其二十二歲の時に野砲聯隊へ志願兵として入營し馬から落ちて負傷し除隊になつたのであるが兎も角も國の法律を遵奉したのである。普佛戰爭の時にも國の爲めに傷病兵の看護に從事して居るのであつてバーゼル大學で教育論を講義した頃は後年獨逸を嫌つて眞の歐洲文化、眞の歐洲人を描き出ださんとしたのと違つて餘程獨逸の國に執着し眞の獨逸の精神を發揮せしめんとの考が强かつた樣に思はれる。從つて教育論に於ては國家の教育政策は眞の獨逸の精神と一致して居らない。文化人を作るの教育こそ眞の獨逸精神と一致して居ると論じて居る。彼が希臘古典の教育を推奬したのも獨逸精神より離れんとしたのではなく寧ろ此中には獨逸精神の內容を豐富に發達せしめ文化生活の準備たらしめんとの考も少らず含まれて居る樣に思はれるのである。卽ち、彼が其當時に於て文化人を作らんとの考は一見獨逸の國家を超越して居る樣に思はれるけれども其實は從來の獨逸の國家の教育政策を打破し眞の獨逸精神に基き益此を發

展せしむることの出來る樣な教育制度の根本思想に就て論述して居るのであつて若きニイツエは此點に於て獨逸の國家に忠であつたと見ることが出來ると思ふのである。